

第 25 回 World Congress of Dermatology 体験記

岐阜大学大学院 医学系研究科 皮膚科学教室

松尾真帆

(1) はじめに

私は、2年間の臨床研修の後に、2021年に岐阜大学皮膚科に入局し、2022年6月から岐阜大学皮膚科で勤務しております。

2023年7月3日から8日までの6日間、シンガポールで開催された World Congress of Dermatology (以下、WCD) に参加しました。研修医時代からコロナ禍で過ごした私にとってほとんど経験のない現地開催の学会であったこと、また初めての国際学会であったこともあり、今回の学会参加はとても貴重な体験でしたので、その時に感じたことや学んだことをご報告させていただきます。

(2) 学会について

世界で最も大きな皮膚科学会の一つである WCD は 4 年ごとに開催されています。第 1 回の WCD は 1889 年にパリで開催され、約 130 年の時を経て、今回第 25 回 WCD がシンガポールで開催されました。シンガポールは人口 570 万人の島国で、そのほとんどが中華系、マレー系、インド系の民族で、主要言語は英語です。気候は熱帯に属しており、一年のほとんどを通じて高温多湿です。

街にはホテルやオフィス、ショッピングモールが立ち並び、夜には無料で楽しめるショーなども行われており、観光客でにぎわっていました。おいしい食べ物も豊富にあります。MRT 地下鉄システム、バス、タクシーなど、安価な交通手段もあるため、移動にも困りませんでした。治安もよく、安全に過ごすことができました。

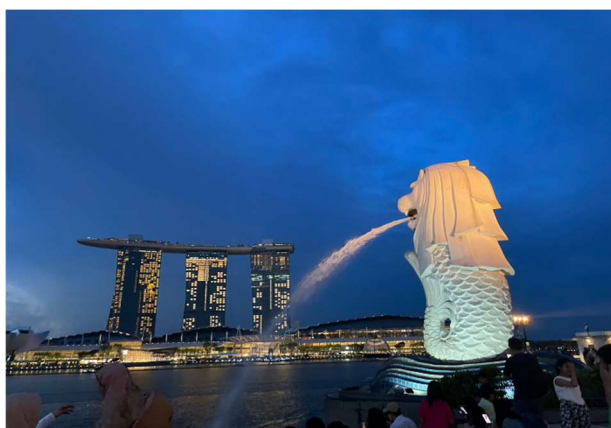


写真1 シンガポールの夜景

WCD において、私は「Multiple papules mimicking dermatofibromas showing histological granuloma in a patient with systemic lupus erythematosus」についてのポスター発表を行いました。ポスターで発表した症例は、SLE 患者の肘関節周囲に多発した結節に対して皮膚生検を行ったところ、組織学的に palisading granuloma の所見を認めた症例です。SLE 患者に皮膚線維腫が多発することはよく知られていますが、自験例では組織学的に palisading granuloma の所見を呈した点が興味深く、palisading granuloma に関わる

様々な論文に目を通すきっかけになりました。自験例が palisading granuloma の病理像を示した理由として、①SLE による結合組織の脆弱性や凝固異常による血流障害に加えて、外的刺激による二次的な変化、または②皮膚線維腫のバリエーション、という自分の考察を加えて発表させていただきました。今回の発表内容は論文化し、現在準備を進めているところです。



写真2 学会会場の風景

(3) おわりに

2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したとはいえ、いまだ感染者数が多い中、本当に海外の学会に参加できるかどうか直前まで不安がありましたが、無事に参加することができ一安心しました。そして、私にとってはほとんど経験のない現地開催の学会への参加でしたが、Web参加では得られない現地ならではの臨場感や空気感を感じることができ、とても貴重な体験となりました。

英語に自信がない私は、初めて国際学会に参加することに対して、緊張や戸惑いがありました。しかし、実際に現地で学会に参加することで、たくさんのことを学ぶことができたのと同時に、普段はなかなか得ることができない刺激を受けることができました。今回の学会で得た知識を今後の診療に役立てていきたいと思えます。

今回の機会を与えてくださった、岐阜大学皮膚科 岩田浩明教授をはじめ、医局の先生方に厚く御礼申し上げます。